





課程博士の学位授与申請に係わる審査報告書

学 籍 番 号	16DC1606
氏 名 (本 籍)	葉 金 珍 (中国)
学 位 の 種 類	博士 (学 術)
報 告 番 号	甲 第 108 号
学位授与年月日	2020 (令和 2) 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
論 文 題 目	“剩男剩女”现象的成因及对策研究： 基于相亲结婚与恋爱结婚视角的中日比较
審 査 委 員	主 査 李 春 利  副 査 唐 燕 霞  副 査 金 湛  副 査 高 橋 五 郎 

2020 (令和 2) 年 2 月 12 日
愛知大学大学院中国研究科

審査の結果の要旨

本学中国研究科委員会の決定に基づいて、葉金珍より提出された博士の学位授与申請書及び参考文献論文等関係資料により、2019年11月8日に予備審査を行った。「大学院博士の学位授与に関する内規」第7条の定めにより、以下の2項目について、審査委員の意見交換を行った。

(1) 学位申請論文の予備審査および履歴事項、研究歴、業績目録について、十分評価できるという結論に至った。

(2) 外国語についての試問は不要であるという結論に至った。

予備審査の結果、博士学位論文の基本的要件を満たしており、学位授与申請の受理を可とし、本審査への移行を可とする。

2019年1月10日16:00から17:00まで、名古屋校舎本館M406教室で遠隔教学システムを使って、葉金珍と学位申請論文の本審査にかかわる口頭試問を行った。

まず、葉金珍より、学位申請論文の趣旨や問題意識、研究方法、論文の構成及び論文の学術的貢献などについて説明がなされた。次に、審査委員による口頭試問に移り、すべての質問に対し、葉金珍より回答や説明がなされ、それらの答弁は概ね審査委員を納得させるものであった。

口頭試問終了後、引き続き審査委員会において議論した結果、以下の結論に至った。

葉金珍の学位申請論文「“剩男剩女”現象的成因及对策研究：基于相亲结婚与恋爱结婚视角的中日比较」は、中国における晩婚化と非婚化の社会現象に注目し、従来の少子高齢化の研究には、出生率の向上や高齢化対策といった既婚者を対象とする研究の蓄積が多いのに対して、その入り口にあたる結婚相手探しや選択のパターン、及びそれが結婚の質に与える影響などに関する研究が不足していると指摘されている。特に、この課題に対する経済学的な実証分析、及び理論モデルと統計データに裏付けられた計量分析がさらに少なく、中日両国の統計データに基づいた本格的な比較分析がほとんど見当たらないとしている。晩婚化と非婚化の問題を解決する目的がたたなければ、出生率低下と高齢化の問題にさらに拍車をかけることになるだろうと筆者は警告している。

そのような問題提起を踏まえて、本論文では、お見合いと自由恋愛は、結婚相手探しの重要な方法であるが、中国の場合は見合い結婚から恋愛結婚へと変化する過渡期にあるのに対して、統計データによれば、日本ではすでに9割以上の方は恋愛結婚を選択しており、中国よりも晩婚化と非婚化が深刻であると指摘されている(第1章)。そのような状況に鑑み、本論文は、社会学理論を経済学の分析枠組みの中に取り入れる試みを行い、数理モデルの構築や計量分析などの研究手法を導入することを通じて、社会学と経済学による学際的なアプローチにより、晩婚化と非婚化の社会問題の解決に新しい解釈と客観的な根拠を提供しようとしている。

具体的には、経済学と社会学における先行研究を中国語、英語と日本語の文献に分けて、丹念に検討されている(第2章)。それを踏まえて、見合い結婚と恋愛結婚の決定要因について、独自の基本仮説に基づいてそれぞれ理論モデルと実証モデルを作り、中国と日本のミクロベースの統計データに基づいて実証分析を展開している。この統計データは「中国家庭追跡調査」(CFPS)と「中国総合社会調査」(CGSS)、及び「the Japanese General Social Surveys」(JGSS)と「the Japanese Panel Study of Consumption」(JPSC)に依拠している。また、実証分析においては、Logitモデル、Probitモデル及び多項Logitモデルなどを使い、回帰分析が行われている。その結果、中国側のデータは仮説を完全に支持し、すなわち、説明変数としての個人や家庭の教育水準、出生の年代などの社会的背景が見合い結婚もしくは恋愛結婚に比較的強い相関関係を示しているのに対し、日本側

のデータに基づいた回帰分析の結果は、中国に比べてそれほど顕著ではなかった(第3章)。

さらに、見合い結婚もしくは恋愛結婚は婚後生活の満足度(婚姻質量)に与える影響はいかなるものなのか、という設問に対して、本論文は、それぞれ結婚満足度、結婚の安定性及び生活の幸福感といった3つの指標から実証分析が行われた(第4章)。その結果、例えば、他の条件を一定とした場合には、容姿というファクターは結婚満足度には相関関係があるが、結婚の安定性には必ずしも顕著な相関関係が見られない。逆に見合い結婚は、結婚満足度こそ高くないが、結婚の安定性については比較的良い回帰分析の結果がみられた。

見合い結婚の問題について、本論文では中国の「お見合いコーナー」や「お見合いブーム」といった社会現象への関心から、夫婦の所得格差(物質匹配度)や意気投合の度合い(精神匹配度)といった指標を導入していわゆる「生活幸福感」について分析され、考察が深められていった(第5章)。

また、中日両国のデータに基づいた比較分析を通じて、現在中国で流行っている両親主導型の「お見合いブーム」は、あまり効果的ではなく、逆に、日本で流行っている新しいスタイルのお見合い、すなわち「婚活ブーム」は2年遅れの結婚成功率の向上に貢献している。それは中国にとって今後大変参考になる方法であるとされている(第6、7章)。最後は総括及び将来展望である(第8章)。

葉論文の評価すべき点については、次の3点が挙げられる。

(1)本論文の学術的貢献は、社会学の研究対象である晩婚化と非婚化の社会現象に対して、経済学の方法を使って理論及び実証の両面において、統計データに基づいた体系的な計量分析が行われたことであり、その意味では一定の独創性が認められる。

(2)本論文の研究手法や分析の論理展開、独自で構築された分析のモデルはいずれも高い水準に達しており、また利用しているデータや先行研究、日中英文の参考文献も適切であり、詳細である。

(3)実証分析に使われたマイクロベースの統計データセット「中国総合社会調査」(CGSS)と「the Japanese General Social Surveys」(JGSS)は、アンケート設計から設問項目にいたるまで類似性が高いため、本論文は初めてそれらを日中比較分析に活かし、完成度の高い本格的な実証分析を達成している。また、分析ツールの開発の面でも独自の工夫や努力が多くみられる。

以上のような評価すべきところがあると同時に、葉論文に不足しているものとして、以下の諸点が指摘できる。

(1)本論文は見合い結婚と恋愛結婚に焦点を当てて、晩婚化と非婚化の要因分析が展開されているが、その深層的な社会経済の要因や、結婚及び家庭に関する価値観の変化、文化的要因などに対する深掘りが不足している。計量分析の手法が多用されているにもかかわらず、分析の結果や結論の一部は、研究方法に比べて斬新さがやや劣っている。

(2)このような研究テーマに対する経済学的なアプローチの限界を感じざるをえない。例えば、「結婚満足度」や「情感産出係数」といったような人間の感情や主観的な価値判断を定量的に把握すること自体にはやや無理がある。一部の仮説では、量的把握を優先したいがために、硬いコンセプトや馴染まない表現などが文中に残ってしまう傾向がある(家庭内の公共財[公共物品]など)。

以上を踏まえて、審査委員会において、問題点は一部あるものの、本論文が完成度の高い学位請求論文として、全員一致で愛知大学大学院の博士学位論文諸規定に定められた諸要件を満たしているという結論に至った。

以上